

2014 年 8 月　宮古支援プログラム

ともしび
共生委員会ニュース

3 号　2014 年 10 月 2 日版

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる 2 年生の修学旅行だけでなく、高等部の 3 年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

募集　青山学院フィリピン訪問プログラム

現在、青山学院高等部では、二名のフィリピンのチャイルドの生活を支援しています。二名のチャイルドからは毎年お礼の手紙が届いていますが、私たちは支援している彼らの暮らしのことをあまりよく分かっていないのではないでしょうか。

「世界の貧困問題」は気になるけどよく分からない。何か役に立ちたいとは思うけど、

実際、何ができるのかわからない。そんな何も知らない私たちが、フィリピンを訪問し、７日間の短い旅の中で“本当の支援”を考える「旅×Shien」。今年も開催します。

会いにいくことから、はじまる一歩があるかもしれません。

青山学院フィリピン訪問プログラム

日程　2015/03/24～03/30（　6泊7日　）

訪問地　フィリピン共和国

費用　150,000円

募集人数　６名

申込期限　10 月 17 日（金）　受付：相良、藤本

申込用紙は、相良、藤本まで





Offering Encouragement

Andrew Scott Carroll (英語科)

I always really enjoy the School Festival. This year, I thought it was especially fun and well-organized, and it showed the talents and incredible energy of students at our school. Two of my favorite moments happened during the opening ceremony and then during the closing on Monday afternoon. During the opening ceremony, it was amazing how positively our students welcomed the students from Miyako. On Monday afternoon, when the results of the sports matches over the weekend were announced, it sounded like people were cheering wildly for both the teams that lost and those that had won. The results didn't seem to matter. It felt like the concepts of insiders or outsiders, winning and losing, had just disappeared. The school was one whole community.

The positive energy made me remember one of my favorite moments in sports. At the 2000 Olympics in Sydney, a swimmer named Eric Moussambani, from Equatorial Guinea in Africa, swam what is considered the slowest 100 meter race in Olympic history. It was very clear to the spectators that he was not really an Olympic level swimmer. In fact, he had only started swimming six months earlier, and because there were no pools for training in his country, he had trained in rivers and lakes, without a coach. At the Olympics, it didn't seem he'd be able to complete the last half of the race, but shouts of encouragement from those watching supported him and allowed him to finally finish.

Today, Equatorial Guinea has an Olympic sized swimming pool, and Eric Moussambani is the national team's coach. He says that the encouragement he received that day continues to support him, and that it is the reason he coaches the team.

As part of a school and the world community, we always find ourselves surrounded by people who need an encouraging push. Everywhere in the world there are sick people, sad and lonely people, and people who just aren't as talented as others. We all need that kind of push, because we all fail many times, and we are all losers as often as we are winners. It doesn't matter what someone did or didn't do when they're in trouble or in a bad situation. Maybe they didn't work hard enough and are now sad because of what happened as a result; maybe they spent their money in a careless way and now have nothing; maybe they were just unlucky; maybe they lived in a place that was hit by a natural disaster; maybe they were just born into a family or country that doesn't have as much as others.



The Olympics isn't special just because of new records and medals. It's also special because of how those spectators responded to Eric Moussambani in Sydney. Our school festival was about more than events and victory; it was about achieving something together. Whether it's at the Olympics or at school, our words and actions have the power to shape someone's life.

【募集】◎平和・共生に関する活動に興味がある人は武藤、相良、藤本、中久木、キャロル、ベリーまで。

◎次回共生委員会ニュースに掲載する文章を募集中です。（武藤まで）

◎カフェテリアに平和・共生関連の掲示コーナーを設けます。ぜひ見て下さい。

2 年生はいよいよあと 1 か月で修学旅行です。夏休みには各自が戦争体験をした人へのインタビューや地域の戦争に関する調査をおこないました。それらを踏まえて、長崎など現地を訪れてください。そこで被爆者の方の話を聞くなどして、さらに平和に関する学びを深めていって下さい。

ALL 青山宮古支援プログラム　2014 年 8 月 1 日～7 日

幼稚園の家族から大学生までオール青山で宮古訪問をしたプログラムへ高等部代表として参加した生徒会、文化祭実行委員の生徒の感想です。

「東日本大震災と私」

HR304（文化祭実行委員）T.K.

二〇一一年三月十一日、私は学校にいました。その日も友達と「もうすぐ春休みだね。」「とうとう来月から受験生になってしまうね。」と普段と変わらない会話をしながら過ごしていました。授業が全て終わり、教室で帰りの会をしている途中、突然学校が大きく揺れました。とても長かったです。私は中学一年生まで父の仕事の都合で海外に住んでいたので地震というものをほとんど経験したことがありませんでした。だから揺れている間、とても強い恐怖感に駆られていたのを今でも憶えています。揺れが治まり担任の先生から「東北ですごい被害が出ているそうです。」ということを聞かされました。家に帰りニュースを見ていると東北の映像が流れていました。家が流され町が消え、とても現実に起きているとは考えられませんでした。岩手県、宮城県、福島県の三県には海外生活で出会った親しい友人や先生が住んでいました。「彼らは大丈夫なのだろうか、もしかしたら流されたのではないだろうか。」と、とても心配になりました。親に連絡を取ってもらいましたが全く繋がりませんでした。連絡が取れたのは数日後でした。

一ヵ月が過ぎた四月、学年が一つ上がり受験生になりました。塾に通い第一志望に合格するために自分なりに必死に勉強していました。また中学最後の学校生活を、みんなとたくさんの思い出を作り、楽しんでいました。もしかしたら避けていたのかもしれません。被災地にはまだまだ復興していくために助け合っていく必要があることを知りながら、自分が楽しみ、そして願いを叶えるために、見て見ぬふりをしていたのだと思います。

無事青山学院高等部への入学が決まった私は受験勉強を終え、時間にも余裕ができるようになりました。テレビを見る機会も増え、三月だったので震災のドキュメンタリー番組も放送されていました。震災から一年が経ったにも関わらず、まだまだ被害の爪痕が残る東北、進んでいない復興。とても大きな衝撃を受け、悲しくなりました。しかしそれと同時に「自分は今まで何をしてきたのだろうか。何か助けられることはなかったのだろうか。」と自分に問いかけるようになりました。

高校生になり、震災の現状を知る機会が増え、ますます力になりたいという思いは強くなっていきました。しかし、一体何をしたらいいのか分かりませんでした。多額な募金を出来る訳でもなく、たくさんの支援物資を送れることも出来ません。色々考えましたが何も思いつきませんでした。当然だと思います。被災地に行ったこともない人が被災者の気持ちを理解することなど不可能に近いと思います。一度東北へ行ってみようと考えている中で今回の「all 青山東日本大震災被災地ボランティア 2014」のお話がありました。このチャンスを逃したらまた後悔すると思い、参加させていただくことを決めました。

八月一日、東北に向かっているバスの中で、あるビデオを見させていただきました。それはあの日、津波が自然豊かな町を破壊しているものを、被災者が撮影したものでした。被害の大きさを改めて教わりました。しかし私は、四年が過ぎた今、復興が進み震災前に近い景色が広がっているものだと考えていました。ところが、その考えは浅はかであり、甘くない現実を突きつけられました。

研修時、実際に津波が襲ってきた防潮堤の上から街を見渡せる機会がありました。いくつか家はあるものの、空き地も多く見られ、寂しい景色が広がっていました。反対を向けば海でした。この防潮堤から眺めた海、そして浄土ヶ浜観光船で廻った海に、もしかしたらまだ発見されていない方々がいるかもしれないと思うとやるせない気持ちになりました。

田老での仮設交流会、青山 day ではたくさんのチビッ子と触れ合うことが出来ました。私が担当していたブースでは人の出し入れが多く、またエアー遊具は常に揺れていてとても大変でした。しかし、みんなが笑顔でたくさん遊んでくれる姿を見ていると疲れなど感じませんでした。それ以上にスゴイ励まされたと思います。というのは、遊具の上ではチビッ子たちが色々な学校での出来事などを話してくれて、出し入れの誘導をしている時は「ありがとう」と感謝の言葉をくれたからです。本当は私がもっとみんなを楽しませなければいけないと思っていましたが、励まされることばかりでした。それ以外にも今回のボランティアでは本当にたくさんの事を学ぶことができました。

まだ東北は震災前の姿には戻っていません。しかし、全く復興が進んでいない訳ではありません。少しずつですが確実に、震災前の町の姿を取り戻しています。

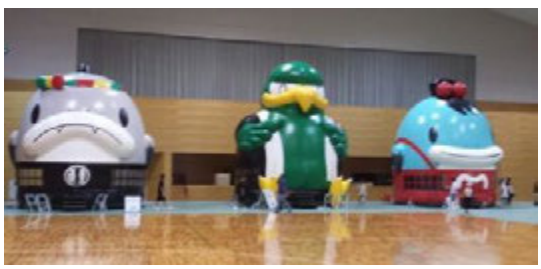
ただ、まだまだ私たちも助け合っていくべきです。二〇二〇年の東京オリンピックを初め、これからも様々なイベントが待っています。私たちだけが楽しんでいいのでしょうか。私はそうは思いません。東北を含め、みんなで楽しまなければ意味はないと思います。だからこそ、みんなで助け合い、盛り上がっていきたいです。最後に、このボランティアで出会えた皆さんに感謝し、そして一日もはやい東北の復興を祈ります。

宮古ボランティアを通して

HR201（文化祭実行委員）　O.H.

『行ってよかった。』家について最初に思った言葉である。私は七日間、岩手県宮古市に行って学んだことが非常に多かったと感じていた。しかしながら、率直に言うとはじめはこのボランティアも現地の人にとってはありがた迷惑ではないかと考えてしまったこともあった。10 時間バスに揺られ、緑豊かな土地を抜けると何もないまっさらな土地が広がっていた。その場所は以前宅地だったもので被災により流されてしまったと説明をいただいた。7 日間その場所は通らない日はなく、いろいろな意味で深い思い入れが芽生えた。そしてグリーンピアに着き、仮設住宅の多さに驚いた。仮設住宅を訪ねて回ったときに優しい方ばかりで二日目の朝、宮古の被災地研修に行った時に映像や写真では計り知れなかった被害の甚大さを感じ取り、被災地の復興が三年経った今でもやっと瓦礫の撤去が終わった程度であることに少し危機感を覚えた。もう三年、されど三年。三年という歳月が短いと感じるか長いと感じるかはその人次第だが、私には長いと感じる。しかし、三年という長さで少しずつでも被災地が復興しているのであるならば自分のことのように嬉しく思う。首都圏では東京オリンピックなどでの再開発計画で建設を進めており、被災地では資材不足、人材不足を招いていると現地の方はおっしゃっていた。日本経済の活発化も大事だと思うが、苦しみを覚えている人がいらっしゃるのであるから両立というか、最善策を講じて欲しいと思った。2 日目の田老お楽しみ会を宮古高校と宮古北高校のみなさん、大学生、短大生と力を合わせて開催することができ、微力ながらも関われたことに誇りを持っている。田老の仮設住宅に住んでいる子どもたちやその親御さんの楽しんでいる姿やエア遊具(ふわふわ)に何回も並んでくれる姿を見ていると元気になってきて、温かい気持ちになることができた。片付けも宮古の高校生と協力し、迅速にすることができて後のディスカッションでよりお互いの理解が深まったと感じた。

田老お楽しみ会や青山 day、宮古高校訪問などで交流、コミュニケーションの大切さを改めて実感した。巷で『コミュ障』などという言葉を耳にする。ネットスラングであったが近年よく使われるようになっており、調べてみると『他人との他愛もない雑談が苦痛であったり、苦手な人』と意味が記されていた。若干私もその傾向にあるのだが、コミュニケーションをしなければ何も始まらないのがこの行事であり、初めて会う人とどれだけ話すことができて打ち解けることができるかが今回のカギだったのではないかと後々思うようになった。交流とは自分の意見を相手に伝えることだと考える。相手に自分の意見を伝えるには必然的に自分自身が意見を持っていなければならない。また相手と会話するには相手自身に興味を持たなければ会話は始まらないとも考えるようになった。宮古に言ったおかげでいろいろなことを考えることができた。



3 日目の日曜はいつもとは違う教会で聖日礼拝を守ることができ、新鮮であった。また被災後の写真も拝見したが跡形もなく、牧師先生が見せてくださったタペストリーだけは跡が残っていた。その後の浄土ヶ浜観光船ではうみねこなどの鳥が群がりながらも海から被災状況を見て確認した。海は当たり前なのかもしれないがきれいであった。

4 日目の青山 day、メインイベントは地元の中学生や高校生も手伝ってくださり、スムーズな設営、運営、片付けができたかと思う。運営スタッフの不慮の事故は大変驚いたが、お客様の怪我はなく無事に終わってよかった。またアキザトさんの手伝いほど頼りになるものはないと感じた。青山 day の式典に意外とマスコミが来ていて驚いたことも覚えている。調印記念夕食会は宮古に来ていた青山学院関係者の方々と夕食を共にすることができ、楽しく、前述した通りコミュニケーションの大切さを実感した。

5 日目は全員で三陸鉄道に乗ることができ、楽しく過ごすことができた。午後から宮古高校に行くことができスポーツ交流、文化祭で販売するチャリティーグッズのデザイン、たわいもない会話や部活交流も行い本当に刺激的で有意義な一日になったと振り返ることができる。

6 日目は 30.5m もの津波の脅威が振るった重茂や、被災した教会がある釜石の方にいき、自然の恐ろしさを再確認、忘れてはならないものと感じた。最終日のハンドベルは思い出すと目頭が熱くなるほどすばらしいものであり、『ふるさと』や『花は咲く』のきれいな合唱は自然と涙がこぼれ落ちた。



7 日間宮古市に滞在していて、様々な人や場所に巡り会えた。きっと個人個人、感じることは違うと思うが、すばらしいことをしてきたんだと胸を張ってもいいのではないかとも思えるようになってきた。この上ない経験をありがとう。